

優秀賞

暮らしと進路をつなぐ私の挑戦

山形大学附属中学校

3年 近江 那月

中学1年の春、私の生活は大きく変わった。母が病気で亡くなり、家の中は静まり返った。悲しみの中で、私は「泣いてばかりはいられない」と心に決めた。これまで母がしてくれていた台所や洗濯の仕事を、今度は私が担おうと思った。進路のことはまだ遠く感じていたが、このときから私は、勉強と家事の両立という挑戦を始めた。

最初にぶつかったのは「時間」という壁だった。部活から帰るとすぐにエプロンをつけ、米を研ぎ、みそ汁を作る。ところが火加減を誤って鍋を焦がし、洗濯物は取り込みが遅れて湿ったままになった。気付けば宿題は夜遅くにまわり、眠い目をこすりながら机に向かう日が続いた。どれも中途半端で、自分が嫌になり、台所でひっそり泣いた夜もある。

そんなある日、父がぼつりと言った。

「味、少し濃いけど、あったかいね。ありがとう。」

その一言で、もう一歩踏み出そうと思った。

まずノートの最初のページに段取り表を作った。学校から帰ると、素早く制服を片付けて手を洗い、すぐに夕食の準備に取りかかる。作っている間に社会の用語を暗記し、台所と机を行ったり来たりした。作り置きにも挑戦し、休日に3品をまとめて調理。YouTubeで時短レシピを探し、炒め物や煮物を手早く仕上げる工夫を覚えていった。勉強と家事を両立するコツも、少しずつ自分なりにわかってきたように思えた。

中2になる頃には、家事を父と分担するようになり、生活の流れが安定してきた。夕食の主菜は私で、副菜は父。洗濯は曜日ごとに分担し、月・水・金が父で火・木・土は私。日曜は二人で取り込み、畳む作業も協力した。勉強時間は放課後や弁当を作る前で確保する。英語は湯を沸かしている間の数分で単語カードに目を通し、数学は夕食後の30分で計算演習をした。学校でも休み時間や授業前の5分を使って、暗記や小テストの見直しを行う。短い時間で区切って集中する工夫を重ねるうちに、両立の手応えを感じられるようになった。

私の中で「両立」の意味が変わり始めたのはその頃だ。家事は私が家族の一員であることを実感させ、勉強は私を確実に成長させてくれる。どちらかをあきらめるのではなく、どちらも一歩ずつ前へ進めばいいのだ。そのために必要なのは完璧さではなく「続け方」だと気付いた。テストの点が思うように伸び

ないときも、段取り表を見直して改善を一つだけ加える。例えば、暗記を効果的といわれる夜にして、朝の登下校中には音読を練習する。そんな小さな修正を積み重ねていった。

中3になり、志望校を真剣に考えるようになった。パンフレットを読み、必要な学力や学校生活を調べるうちに、胸の奥に小さな火がともった。朝は朝食と弁当作り、放課後は自習室で過去問の解き直し。帰宅後は夕食を整え、夜は翌日の下ごしらえと用語の暗記。忙しい一日なのに、台所の明かりをつけると、不思議と心が落ち着いていた。母がよく言っていた「段取り八分」という言葉を、自分の中で確かめられるようになった。もちろん、計画どおりにいかない日もある。料理の味を失敗したり、眠気に負けて勉強を投げ出したりする夜もあった。そんなときはいつも、干したシャツの袖が風に揺れるのを見て、母を思い出しながら深呼吸する。「今日はここまで。」と心の中でつぶやき、計画を一行修正する。段取り表は毎日ではなく、迷ったときや立ち止まったときだけ開いた。いくつもの丸が並んでいき、それが私の3年間を振り返るしるしになっていく。

小さな記録を続けるうちに、三つの力が自分の中に育っていった。一つ目は、時間を「見える化」する力だ。やることを分け、順番を決めて、無理なら一つ減らす。二つ目は、失敗を改善のチャンスにする力。焦げた鍋も、味の濃いき汁も、次の工夫のきっかけになった。三つ目は、誰かの「ありがとう」を支えに変える力である。何気ない家族の一言が、いつも私の背中を押してくれていた。

母のいない台所は、今でもさみしいことがある。それでも、私が火をつけ、鍋をかき混ぜ湯気が立つと、部屋の空気は少しあたたかくなる。電気スタンドの下でノートを書き進めると、文字がいつもより真っすぐ並ぶ。日常を整えることは、未来への支えになるのだと気付いた。両立の土台は特別な才能ではなく、毎日の小さな段取りと、続けるという決意だったのだ。

この経験を、将来の自分の生き方に生かしていきたい。明日もまた、台所と机を行き来し、ノートに小さな丸を書く。日々の積み重ねとともに、私の挑戦はこれからも続いていく。